

# 論文 Today

学校、勉強、知性——80年間のアメリカ印刷メディアを通じた、教育領域のジェンダーステレオタイプの変遷 1930～2009年

Boutyline, Andrei, Arseniev-Koehler, Alina and Cornell, Devin J. (2023) "School, Studying, and Smarts: Gender Stereotypes and Education Across 80 Years of American Print Media, 1930–2009," *Social Forces*, Vol. 102, No. 1, pp. 263–286.

東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員 森川ゆり子

## 1 はじめに

Ridgeway (2011) が提示した大きな問いに、社会が大きく変化してもなぜ男女の階層が維持されるのか、というものがある。社会の変遷を通じて女性が労働市場に大量に参入し、かつての有償労働をする女性が少なかったという格差の基盤が崩れても、男女の階層的なパターンが持続するのはなぜなのか。Ridgeway はこの理由の1つとして、社会に広く共有されるジェンダーステレオタイプの役割を指摘する。ジェンダーステレオタイプには、男性を女性よりも有能で地位が高いとみなす前提が含まれ (Ridgeway 1997)，人々が社会関係を構築する際に無意識にこうした信念に頼ることで、不平等が再生産される (Ridgeway 2011)。

特に、社会が変化しても文化的信念の変化はそれに遅れるため、人々は新しい社会を古い枠組みで解釈し、暗黙のうちに既存の男女の階層秩序を維持してしまう (Ridgeway 2011)。ただし、ジェンダーステレオタイプの体系的・総断的に検証する試みは限られており、この議論の実証は十分には蓄積されてこなかった。

この課題に取り組んだのが、Boutyline, Arseniev-Koehler and Cornell (2023) である。彼らは教育領域に焦点を当て、1930～2009年のアメリカの印刷メディアに含まれる約2億語のテキストに単語埋め込みモデルを適用し、女性の教育達成が男性に追いつき、最終的に上回るにつれて、教育に関連するジェンダーステレオタイプがどのように変化したかを検討している。

その結果、ジェンダーステレオタイプは容易には変化せず、変化が生じても既存の階層秩序を維持させる方向で再構築されることが示された。Boutyline, Arseniev-Koehler and Cornell (2023) の示す教育領域におけるジェンダーステレオタイプの変遷は、

Ridgeway の問題意識、すなわち社会変化にもかかわらず格差が持続するメカニズムを理解するうえで重要な視座を提供している。

## 2 データと分析方法

Boutyline, Arseniev-Koehler and Cornell (2023) の分析データは、Corpus of Historical American English (COHA) 内の1930年から2009年までの80年間の印刷メディアによる約2億語を収録した大規模コーパスである。長期的变化を捉えるため、20年幅の重複ウィンドウに分割し、5年ごとにスライドさせて合計13のコーパスを作成し、各コーパスで単語埋め込みモデルを構築した。

単語埋め込みモデルは機械学習アルゴリズムであり、単語を高次元ベクトル空間の位置にマッピングすることによって単語の意味を定量的に捉える。単語の相対的位置は、その意味の類似性や相違点に対応する。この空間における対義語ペアの差分ベクトル軸は文化的意味の次元に対応し、この軸に語彙ベクトルを投影することで、広く共有された連想を捉えることができる。このアプローチに従って、まず各コーパスのベクトル空間で「女性」に関連する語彙ベクトルと「男性」に関連する語彙ベクトルの差分から男女の意味方向を表す軸を算出する。次に、教育に関連する語彙と、男女の意味方向の軸とのコサイン類似度を計算することで、各語彙が男女どちらの連想を持つのかを算出する。

分析対象の語彙は、教育に深く関連する6つの概念（「学校教育」「学業努力」「社会行動スキル」「問題行動」「知性」「反知性」）から設定した。まず辞書を用いて候補語を抽出し、出現頻度が低いものや文脈が合わないものを除外して、時代ごとの分析対象語彙を選定した。これら教育関連語彙と男女の意味方向の軸と

のコサイン類似度をコーパスウインドウごとに計算し、概念ごとにその平均値を算出した。これにより、各概念が各時代において、男女どちらの連想を帯びていたかを把握した。

### 3 結果と含意

分析の結果、次のような事項が明らかになった。

まず「学校教育」「学業努力」に関する語彙については、1940年には学校教育に関する語彙（school, class, educationなど）は、男性的でも女性的でもなかった。しかし、その後の時代の変遷を通じて着実に女性らしさを帯び、1955年には確実に女性的連想を獲得した。同様に、学業努力に関する語彙（studyなど）は1940年代には男性的でも女性的でもなかったが、1975年には女性化した。

「社会行動スキル」「問題行動」に関する語彙は、教室での行動に関する語彙であるが、ジェンダーステレオタイプの基盤（女性＝共同性、男性＝作動性）に対応する語彙である。女性的に分類される社会行動スキルに関する語彙（cooperationなど）は、時系列全体を通じて一貫して女性的であり、男性的に分類される問題行動に関する語彙（behaving aggressivelyなど）も、時代を通じて一貫して男性的であった。

「知性」に関する語彙（genius, smartなど）については、1940頃にはわずかに女性的であったが、1955年以降これらの語彙は男性化し、1990年以降は完全に男性らしさを獲得した。特に「genius」については、最後の10年間で男性らしさとの関連が極めて強くなっている。「反知性」に関する語彙（foolishなど）については、1940年頃は女性らしさとの関連を示していたが、1990年頃には男性化した。反知性に関する語彙も男性化したことは、知性の有無そのものが男性化したと捉えることができる。

まとめると、女性は共同性、男性は作動性というジェンダーステレオタイプの基盤は時代を通じて安定している。しかし女性の教育達成の進展に伴い、学校教育・学業努力に関する語彙が女性化する一方、知性・反知性に関する語彙は男性化した。著者らは、この知性に関する語彙の男性化について、「才能は努力よりも上」という人々の認識を反映している可能性を

指摘する。つまり、女性の教育達成という社会的变化を、従来の男女の階層秩序を通じて再解釈することで、新たなステレオタイプを構築し、既存の男女の階層が維持されるというダイナミクスを見出している。

### 4 本論文の貢献と今後の展開

Boutyline, Arseniev-Koehler and Cornell (2023) の第一の貢献は、ジェンダーステレオタイプの歴史的ダイナミクスを明らかにした点にある。女性が高い教育達成を実現し、かつての学歴格差の基盤が崩れても、既存の男女の階層秩序を維持する形で「男性は天才型、女性は努力型」という新たなステレオタイプが構築されることを示し、ジェンダーシステムの適応的持続性を明らかにした。

第二に、単語埋め込みモデルを用いて、大規模テキストデータに埋め込まれたジェンダーステレオタイプを観察し、従来のサーベイ等では追跡が難しかった語彙の文化的意味の変遷を捉えた点も重要である。このアプローチは、これまで計測不可能であった変数や、欠落した変数などへのアクセスを可能にするという手法的意義を持つ。

本研究の意義は、労働市場研究への応用可能性にも及ぶ。採用などの不確実性が高い状況で、人々は無意識にステレオタイプに頼る可能性があり、労働市場におけるジェンダーステレオタイプ研究ができるだろう。日本における展開としては、大規模コーパスへのアクセスには制約があるものの、スコープを絞った小規模なコーパスを用いて、労働市場における不平等を新たな視点から分析できる可能性がある。

#### 参考文献

- Ridgeway, Cecilia L. (1997) "Interaction and the Conservation of Gender Inequality: Considering Employment," *American Sociological Review*, Vol. 62, No. 2, pp. 218-235.  
——— (2011) *Framed by Gender: How Gender Inequality Persists in the Modern World*, NY: Oxford University Press.

もりかわ・ゆりこ 東京大学大学院人文社会系研究科特任研究员（日本学术振興会特别研究员PD）。主な論文に「女性管理職は“適正”男女賃金格差を縮小させるか」『理論と方法』38卷2号, pp. 225-239 (2023年)。階層、労働社会学専攻。